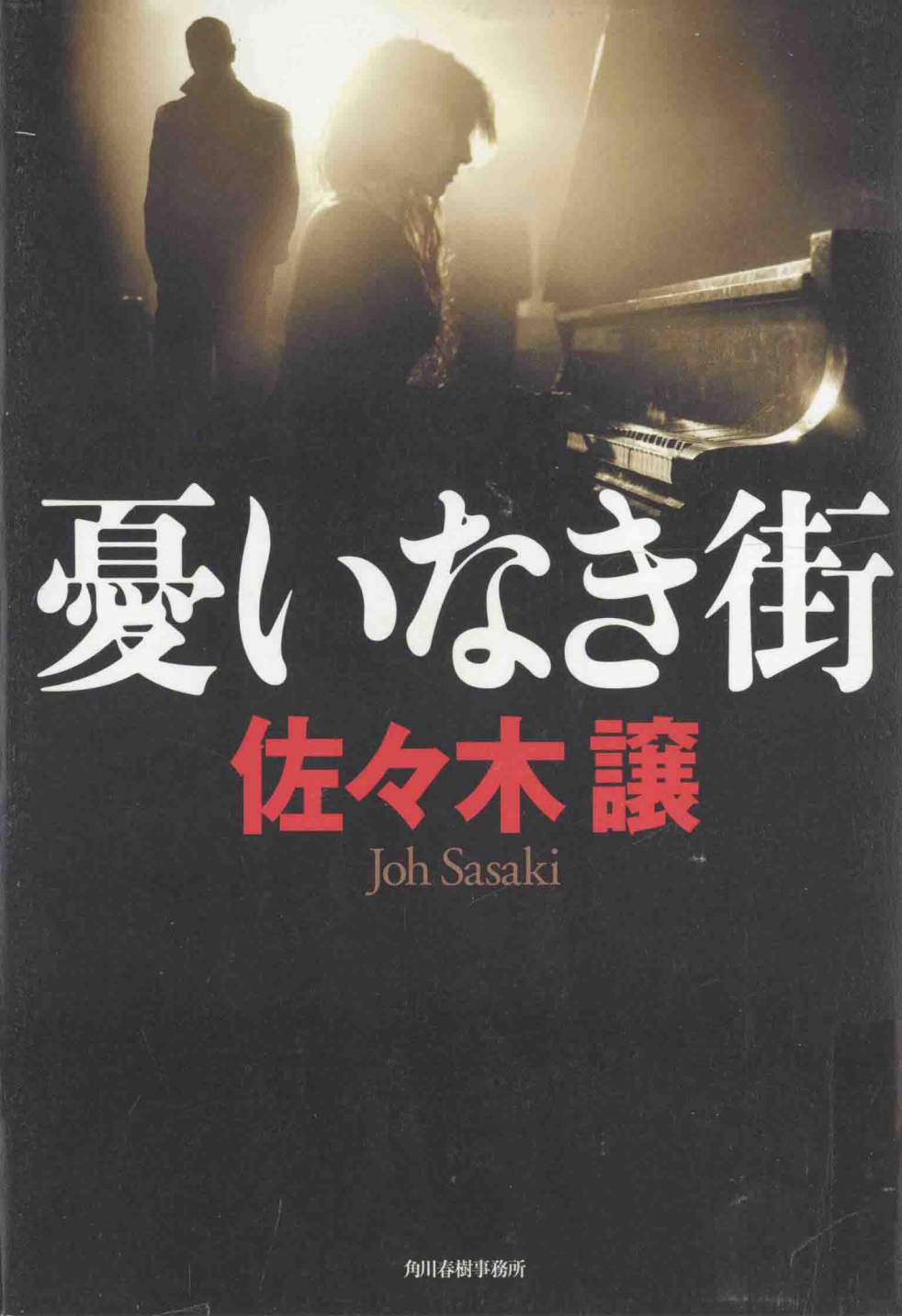




憂いなき街

佐々木 譲

Joh Sasaki

佐々木讓

憂いなき街

Joh Sasaki



角川春樹事務所

著者略歴

佐々木譲（ささき・じょう）

1950年札幌生まれ。『鉄騎兵、跳んだ』でオール讀物新人賞、『エトロフ発緊急電』で山本周五郎賞、日本推理作家協会賞、日本冒険小説協会大賞、『廃墟に乞う』で直木賞を受賞。そのほか『ベルリン飛行指令』『五稜郭残党伝』『天下城』『笑う警官』『制服捜査』『警官の血』『警官の条件』『地層捜査』『代官山コールドケース』『獅子の城塞』など著作多数。

© 2014 Joh Sasaki

Printed in Japan



Kadokawa Haruki Corporation

佐々木譲

うれ^まいなき街

*

2014年4月28日第一刷発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川春樹事務所

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 イタリア文化会館

電話03-3263-5881(営業) 03-3263-5247(編集)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。

定価はカバーおよび帯に表示してあります

落丁・乱丁はお取り替えいたします

ISBN978-4-7584-1234-6 C0093

<http://www.kadokawaharuki.co.jp/>

目次

土曜 日	金曜 日	金曜 日	金曜 日	木曜 日	水曜 日	火曜 日
	夕刻	午後	朝			
322	293	217	153	119	16	5

土曜 日	金曜 日	金曜 日	金曜 日	木曜 日	水曜 日	火曜 日	目次
	夕刻	午後	朝				
322	293	217	153	119	16	5	

憂いなき街

装帧 多田和博
写真 Getty Images+Fieldwork

火曜日

奥からピアノの音色が聞こえてきた。生で演奏中だ。ジャズっぽいアレンジだが、古い恋愛映画のテーマ曲だった。

津久井卓巡査部長は一瞬だけ、そのラウンジの入り口で入るのを躊躇した。同僚の滝本浩樹が、背中を軽く押してきた。

たしかにここでためらう必要はない。コンサート会場ではないのだ。ホテルのピアノ・ラウンジだ。演奏中だからといって、出入りは自由だ。礼儀知らずとがめられることはない。そもそも客の談笑の声さえ聞こえてくる。その客たちは、たぶん演奏など聴いていない。

しかし津久井は、振り返って滝本に言った。

「ここにいてくれ。様子を見る」

滝本は津久井よりも歳下だが、格闘技系の体格で、容貌も刑事臭さの強い男だった。いまラウンジの中を見渡すには、彼が入ってゆかないほうがいい。津久井はその点、刑事臭が少ない。一見、軟派な男にも見える。ラウンジの入り口に立って中をのぞいても、鋭敏になっているはずの被疑者に警察が来たとは思われないはずだ。

滝本がわかったと言うようにうなずいて、エントランスの後ろに下がった。

今夜、閉店間際の宝石商が襲われたのだ。店に侵入してきたのは覆面姿の男が三人。そのうちのひとりが必要に、仲間たちに指示した。

十分だ。もういい。逃げるぞ。

しかしひとは、かなりの程度にひとの声を区別して記憶する。ひとことふたこと声を聞くだけである。被害者の宝石商は、声からそれがかつて取り引きをしたことのある金券ショップの従業員だとわかった。強盗たちが逃げ去ってから五分後、非常ベルのおかげで警備会社と警察とが駆けつけて、縛めから解放されると、宝石商はすぐにその男の名を機動捜査隊に告げた。山口ユキヤ。二時間前のことだ。

機動捜査隊はその男の名から、たちまち多くの周辺情報をつかんだ。そのひとつが、被疑者が今夜故買屋と会うことになっているという情報だった。強奪品の取り引きが行われるのかもしれない。故買屋がどんな男かはわかっていない。場所は札幌市内のホテル地下のピアノ・ラウンジ。札幌市内のホテルでピアノのあるラウンジは、十指ほどあるが、地下にあるとなると、ふたつだけだった。

機動捜査隊は、その両方に覆面バトカーを急行させた。一台に乗っていた津久井と滝本のふたりは、いまここ、中島公園に隣接する大ホテルに着いて、この地下へと駆け下りてきたのだった。

津久井は、滝本をその場に待機させて一歩中に入った。

間接照明だけの、薄暗い空間だった。津久井は目が慣れるのを待ちながら、ラウンジの中を見渡した。

左手にカウンターがあり、右手が客席だ。深く腰を下ろすことのできるソファやカウチが二十席ば

かり、ゆったりと配置されている。客は十組ばかりか。ほとんどがスーツ姿の男たちで、女はふたりいるだけだった。

正面奥に黒いグランドピアノがある。弾いているのは、女性ピアノリストだ。七分袖の黒いシャツにロングスカートだった。三十歳くらいだろうか。短かめに切った髪を振り分けている。目は大きく、南国的な顔立ちだった。

ウェイターが、右手奥の男性客の前にグラスを置いたところだった。ウェイターが背を起こすと、その陰になっていた男が見えた。歳のころ三十前後か、黒っぽいスーツ姿の男。近ごろミュージシャンなどがかぶっている罌^{つば}の細い帽子をかぶっている。そのテーブル席には客は彼ひとりだ。鞆^{かばん}を身体^{からだ}の横に置いている。

あれか？ 手配の情報と一致する。二十九歳、芸能業界人ふうの身なり。帽子をかぶっていることが多い。

津久井は一步下がると、振り向いて滝本を見た。

「いる。ひとりだ」

「ひとり？」

情報では、彼はここで故買屋と会う。被疑者が宝石商を襲った数時間後にはもう故買屋と落ち合うとすれば、事件はその故買屋が関わっていた可能性もある。つまり、共犯。あるいは主犯そのもの。どうする？

津久井は機動捜査隊の隊内無線機を取り出すと、オンスイッチを押した。

「着きました」と津久井は報告した。「手配の情報に合致する男がいます。ひとりです。相手を待ち

ますか？」

少しの間を置いてから、相手の声が聞こえてきた。

「いい。まずそいつを確保しろ。任意で引っ張れ」機動捜査隊の長正寺班長だ。「もう一台も三分以内に着く」

「はい」

津久井はスーツの上着の上から腰の拳銃ホルスターの感触を確認すると、滝本に目で合図した。入るぞ。

滝本がうなずいてきた。

津久井はラウンジに入り直すと、大腿にその帽子をかぶった若い男に向かった。滝本がすぐあとを続いている。通路の先にいたウェイターのひとりが目を向けてきたが、すぐに客ではないと判断したようだ。道を空けた。津久井たちは、ためらうことなくその通路を進んだ。

男が顔を上げた。津久井たちに気づいたようだ。顔がこわばったのがわかった。

その男のいる席の手前で、滝本が向こう側の通路に回った。

津久井は男のすぐ横に立って見下ろした。男の脇の鞆は、本革のアタッシェ・ケース様だ。中身が旅行用品ひとセットとか、コンサドール札幌のユニホームということはありえまい。もう少し金目のもの、あるいは金目のもののサンプルだろう。

滝本も、席の反対側を押さえる位置にいた。

津久井は男を見下ろすと、警察手帳を見せて言った。

「山口ユキヤさんですね？」

男がまばたきし、緊張した声で言った。

「だとしたら？」

「今夜、市内で強盗事件があった。その件で、山口さんを探しているんです」

「強盗？」顔に動揺が現れた。予想外の事態なのだ。ここまで早く、事件と自分とが関連づけられようとは。「関係ないよ」

「山口さんではない？」

「なんで言わなきゃならないの？」

「ひとちがいなら退散します。何か身分証明書でもお持ちですか？」

男は津久井と滝本を交互に見てから、ぼそりと言った。

「山口だ」

「事情聴取に協力していただけますね？」

「どうして？」

「事件現場にあなたがいたという情報があるんです」被害者がそう証言したと明かしてやる必要はない。「よければ、同行していただけませんか」

山口が反応しないので、滝本が言った。

「来るのか、来ないのか」

声は低いが、威圧的だ。

そばの席の客たちは会話をやめ、津久井たちを注視し始めている。空気は凍りついてきた。

津久井は言った。

「逮捕じゃありません。任意です。どちらでもいいんです。ここで誰かと約束でも？」

「ああ」山口はすぐに打ち消した。「いや、何も」

「じゃあ、ご一緒してもらってもかまいませんね」

「任意なら、断ってもいいんだろう」

「もちろんです」

滝本が横から、鞆を指で示して言った。

「その鞆はあんたのか？」

男はアタッシェ・ケースに手をかけて身体のように引き寄せた。

「そうだ」

「引き上げる前に、その鞆、中身を見せてもらえないかな」

「断る。そういう権利もあるよな」

「あるさ。だけどこっちも質問する権利はある。中身はなんだ？」

「あんたたちの知ったことか」

津久井が言った。

「じゃあ、ここで始めます。山口さんがいたという情報がある以上、かなり突っ込んだ質問をするのになります」

津久井の声は少し大きくなった。ピアノの演奏をまちがいに邪魔をしているだけの音量だ。

山口の動揺がより激しくなっているように見えた。現場にいたという証言が出たと聞いて、観念しかかっているのだろう。あとひと押しだ。

滝本が言った。

「一緒に来て、正規手続き通りにやったほうがいいぞ。弁護士も呼べる」

山口はふいに両手で顔を覆った。急に頭痛でもしてきたかに見える。それとも、いま自分が追い込まれているという事実、耐えきれなくなったか。

津久井たちが数秒間見守っていると、山口は顔から両手を離し、アタッシェ・ケースを持って立ち上がった。

「行けばいいんだろう」

精一杯の虚勢だ。被害者が名前を挙げて実行犯のひとりだと証言しているのだ。任意同行では終わらない。彼もそれは承知している。

津久井が先に立って通路を歩いた。しんがりが滝本だ。さっき道を空けたウェイターが、伝票のホルダーを持ち上げて困ったような顔を向けてくる。滝本が山口に支払うように促すと、山口は不服そうに財布を取り出して支払った。

通路はピアノの前で折れて、ラウンジの入り口へと続いている。そこまできたとき、グランドピアノの向こう側のピアニストと視線が合った。

演奏はそのまま続いているが、ピアニストはいまの山口との一部始終を横目で見ていたようだ。目にはほんの少し、好奇心が現れている。

津久井は、演奏の邪魔をしてしまった、という謝罪の意味で小さく頭を下げた。ピアニストも反応した。ほんのかすかに、うなずいたのだ。いいわ、と言ってくれたようだった。

そのピアニストはどこかで見た顔のようにも思えたが、知り合いではない。メディアを通して知っ

た顔か？　それが誰か思い至らぬうちにピアニストは視線をそらした。演奏に退屈している様子があった。その仕事をさして喜んではいけないのかもしれない。

ラウンジを出たところで、津久井たちは位置を変えた。山口をあいだにして、彼を両側から挟み込む態勢を取ったのだ。腕こそかけていないが、山口が逃走しようと思っても、その隙はない。

ラウンジの脇のメニューボードの下に、一枚の貼り紙があった。入るときは、読んでいなかったものだ。ラウンジの催しについての案内だ。

ピアノ　安西奈津美

七時　九時　十一時

六月二十五日まで

安西奈津美……。

その名は知っている。ジャズ・ピアニストだ。何年か前にCDも出しているはず。見覚えがあると思ったのも当然だ。ジャズの専門誌か広告などで写真を見たのだろう。東京で活躍している女性だと思っていたが。東京からやってきて、このピアノ・ラウンジでの仕事を受けていたということか。それも、きょうが最終日だ。

正面の階段を駆け下りてくる男がいる。機動捜査隊の同僚たちだ。

駆け寄ってきたふたりに、津久井は言った。

「山口ユキヤ。任意同行に応じた」

ひとりが向きを変えて、津久井たちを先導するように階段を昇っていった。もうひとりも津久井たちの後ろに回った。

階段の踊り場を曲がろうとしたときだ。階段の上でふっと影が動いた。誰かが下りようとして、あわててあとずさったように見えた。

津久井は山口を横目で見た。彼はうつむいたままステップを上がっている。いま上に見えた男に気づいた様子はなかった。

いまのが故買屋？

津久井は後ろの同僚に言った。

「ちょっとだけ、見ていてくれ」

返事を聞かないままに階段を駆け上がった。そこはもうホテル一階のロビーだった。この時刻でも、大勢の客がいる。団体客がどこからバスで帰ってきたばかりとも見えた。

津久井はさっとロビー全体を見渡した。左手、エントランスの方に足早に移動している男がいる。ひとだかりの向こうだ。ひとごみにまぎれようとしているようにも見えた。白っぽいジャケットに、グレーのパンツ姿。体型と身のこなしから、中年男と見えた。黒いビジネスバッグを手にしている。

ほかには？

いない。この場から立ち去ろうとしている男はいない。いま階段で身をひるがえしたのは、たぶんあの男だ。

男はエントランスを足早に出てゆこうとしていた。エントランスの向こう側は車寄せとなっており、その向こう側には屋外駐車場がある。津久井はその男のあとを追った。しかし、団体客がその場で陽